

日時： 2020年12月21日(月) 18:30~20:00

講師： 演劇ユニット「y/n」(橋本 清氏(演出家・俳優)、山崎 健太氏(批評家・ドラマトウルク))

会場： ZOOM ウェビナー

第82回ジェンダーセッションは、演劇ユニット「y/n」の橋本清氏と山崎健太氏をお迎えし、演劇作品『カミングアウトレッスン』(2020)の映像上映とトークセッションを実施しました。

一般にカミングアウトは、主に性的マイノリティの人が、自らのセクシュアリティを他者に向けて告白する行為だと理解されています。であるがゆえにカミングアウトは、その告白を受け止める側の倫理的・政治的態度の問題——例えば家族や学校におけるカミングアウトや、本人の了承なく第三者にカミングアウトの内容を暴露する「アウトティング」行為などが問題として議論されてきました。それに対し、本講演会では演劇の実践を通じて、言語学などの分野における「スピーチアクト」としてのカミングアウトの側面にフォーカスが当てられたように思われます。今回、映像上映された演劇作品『カミングアウトレッスン』では、橋本氏が「僕」という一人称で語る人物が、観客席の人々に向けて自身のセクシュアリティについて語ります。その合間に、山崎氏が逐一、通訳として橋本氏の語る言葉を英語で翻訳します。ところが、中盤、それまでカミングアウトをしてきた人物が、橋本氏/山崎氏のどちらなのか判別がつかなくなるような仕掛けが施され、次第に演劇作品内でのカミングアウトが、役者としての橋本氏/山崎氏によるものなのか、それとも彼らが演じているフィクション上の登場人物によるものなのか判然としない構成になっています。これらの演出から、本作品でのカミングアウトは、発話に先立ち確固として存在する真実としてのセクシュアリティを伝達する行為というよりも、発話行為そのもの、ないしそれを誰かが聞き取ることによって効力としての意味を産出する行為として徐々に立ち上がります。その結果、セクシュアリティやジェンダー・アイデンティティの見えにくさに加え、不確定性や流動性が強調され、性的マイノリティやカミングアウトなるものに対して(異性愛者の)観客が漠然と抱いている固定観念が浮き彫りになるように思われました。けれども、最後に橋本氏が会場から退出する場面に至ると、そうした曖昧ではぐらかされるような告白を、それでもなおどのように聞き取るのかを問いかけられているようにも感じられました。

こうしたややもすれば難解な印象を与えかねない本作品について、後半のトークセッションでは、チャットを用いた参加者とのやり取りを通じ、橋本氏・山崎氏の演出意図などをお話いただき、参加者の疑問にもお答えいただくことによって、作品のみならずカミングアウトに関する理解を深める機会となりました。普段のジェンダーセッションとは一風変わった演劇作品を交えた刺激的な回を提供して下さった橋本氏・山崎氏、ならびに参加して下さった多くの方にお礼を申し上げます。

(立教大学ジェンダーフォーラム事務局 片岡佑介)

